

Edward Taylor の 詩

序 論

秋 山 健

I

アメリカ文学に関連した Edward Taylor が二人居る。二人共、聖職についた牧師で、時代こそ違いますが、しばしば混同されて来た。現に Lewis Leary 編の *Articles on American Literature, 1900-1950* (Durham, North Carolina, 1954) にも論文が一つ混同して入っている位である。一人の Edward Taylor (1793-1871) は Boston の水夫相手の牧師をしていた人で、Father Taylor として知られている。Emerson と関係があったし、Melville の *Moby Dick* に出て来る Father Mapple のモデルになったとも云われている。

これから私が問題にしようとする、いま一人の Edward Taylor は、詩人で、1642年から1729年の人であった。1668年に英国から、新大陸アメリカへ移住し、後 Massachusetts の Westfield の牧師となった。この Taylor について、私はこれから二つの事、即ち Taylor 研究の現状と、それを背景に一つの詩をとり上げ、それを詳しく読んで、Taylor の詩が如何に読まれるべきかの私なりの方法を示してみたいと思う。Taylor が詩人としての評価をうけたのは、彼の死後200年もたった後のことである。1937年に Thomas Johnson が *New England Quarterly* に一部の詩を發表し、その翌年、Norman Pearson がそのうちいくつかの詩を *The Oxford Anthology of American Literature* に集録したのが、Taylor の

詩人として「発見」された始りであった。更に1939年に Thomas Johnson が“Gods Determinations”という長い詩と“Sacramental (Preparatory) Meditations”のうち、31の詩を集録して、一冊の選集として出版した。

研究の方面では、1941年に Austin Warren が *Kenyon Review* に“Edward Taylor's Poetry: Colonial Baroque”という論文を発表している。これは Taylor を詩人として評価する気運を作ると同時に、その後の研究の方向を示したものとして、重要な論文である。其の後、Taylor は年をおって注目される様になった。Anthology にも、かぎられた詩ではあるが、収められる様になって来た。併し現在でもアメリカ文学史上での Taylor の評価は、必ずしも正当だとは云えない。Taylor の名前さえ出てこない文学史だってあるし、大学の講義にいたっては省略してしまう事も多いのである。

Taylor の詩の評価は、国民文学としてのアメリカ文学の立場からよりも、比較文学の立場から、従来なされて来た。比較文学といっても、source や影響関係の研究よりも、Harry Levin が力説している analogy, motif, stylistics, genre, movement, tradition の比較研究を世界文学の立場から行う意味で、この傾向はアメリカでは早くから行われ、Wellek, Warren, Levin, Morris Croll など、この立場を特に強調している。

先にあげた Austin Warren の論文が示している様に、この立場からの評価は、Taylor の詩の中に「アメリカ的」なものを見出そうとするよりも、当時、再評価されだした「形而上詩人」特に17世紀宗教詩人、Donne, George Herbert, Richard Crashaw, Vaughan, Traherne との関連に於いてなされて来た。今迄かかれた論文の多くは、Taylor の詩の中に「形而上詩」の特徴を指摘しているし、Austin Warren のように、Taylor を“belated baroque poet”とか“Colonial baroque poet”と叫んで、もっと広い立場を考慮に入れた baroque という術語を使う批評家もある。又、*The Poetry of Meditation* と云う本の中で17世紀英国詩を Counter-

Reformation の spiritual exercises の形式にもとづいて明解な分析をこころみ、Yale の Louis Martz のように、Taylor の詩を他の英国宗教詩人の詩と同様に、meditative poetry として評価する立場もある。この Martz の立場は、先の metaphysical なり baroque なりの持つ意味内容とは多少異なった解釈を出してはいるが、いづれにしてもこれらの批評家は Taylor を George Herbert, Crashaw, Vaughan などと比較して、評価して来た。特に Crashaw のもつ mystic な要素を Taylor の詩に見出した批評家の多くは、当然、Puritan の Taylor の Orthodoxy を問題にしたり、又 Puritanism と Anglicanism, Catholicism の ritual の関係を問題にして来た。1960年になって Donald Stanford 編の Taylor の詩集が出て、これには 217 の meditations 全部と他の詩が集録され、Johnson のものと合せて、Taylor の詩殆んどが公刊された。又 1961年には Norman Grabo がはじめて、一冊本の Taylor の研究書を出し、更に今年9月、同じ Grabo の編で、今迄未公刊の説教集 *Christographia* が Yale から出た。これは 14 の説教からなり、Meditations (II) 55を除いて、42から 56迄がそれぞれ Preparatory Meditations として付けられている。これで説教と Preparatory Meditations との相互関係も可成りはっきりして来た。又 Anthology に就いても、Perry Miller を主編者として出版された *Major Writers of America* の第一巻では、Austin Warren が長い Introductory Essay を付けて、Taylor の項を編集している。これには新しく出版された Stanford の Edition にもとづいて、二十数篇の詩を集録している。まだ未整理のままの manuscripts も多いがこの二年間に一応研究に必要な資料が揃った事になる。

II

さて、Taylor は 1682 年から 1725 年迄に、217 の詩を書き残して居る。五週間から六週間の間隔をおいて行われた、聖餐式の聖日の為に書かれた

もので、“Preparatory Meditations before My Approach to the Lord’s Supper, Chiefly upon the doctrine preached upon the Day of Administration” というタイトルが付けられている。従って、それぞれの詩は、Taylor が聖餐式の為の説教を書いた後、その説教で扱った doctrine にもとづいて書かれたもので、説教が教会に於いて会衆を前に公けに行われるものであるのに対して、“Preparatory Meditations” は Taylor のひそかな祈りでもある訳である。それぞれの詩の冒頭に引用されている聖書からの text が必ずしも、詩の主題ではないのも、又殆んどの詩が、聖書へのおびたしい allusions を含んでいるのも、タイトルが示す様に、詩が説教の doctrine についての meditation であるからで、そのことは Grabo 編の *Christographia* とそれに添えられた14の詩との関係から明らかにされる。

現存のこれらの説教は、いわゆる“Plain Style”で、当時の New England の Puritan の説教の典型的なものである。非常に logical な argumentation であるが、それにくらべて、meditations の方は esoteric な性格なもち、mystic な sensuous な imagery が多く見られる。一つには、先に述べた様に、説教が公けのものであるに対して、詩は純粹に個人的なものである故でもあるが、むしろこの点にこそ、Taylor という人の中に Puritanism の両面をみせられている様に私には思えるのである。

さて一つの詩を詳しく読みながら Taylor の詩の特質といったものを考へてみたいと思うがその前に、217 の meditations にほぼ共通してみられる、structure について一言しよう。この structure が Louis Martz のいう art of meditation にそっくりそのまま当てはまるかどうかは、多少疑問もあるが、それでも、それに可成り近い形をそなえている。

(I) 多くの詩が Catholic か Anglican の liturgy で、聖餐に与る前の祈り、精神的にも肉体的にも神の前に自分がふさわしくないという告白の、Domine, Non Sum Dignus (マタイ伝 8章 8篇より、T. S. Eliot の

“Ash Wednesday”にも出てくる) “Lord, I am not worthy” の variation ではじまり, 続いて meditation の主題が示される。

(II) それから, 主題をめぐって詩人の imagination はいろんな方向に展開する。時には一貫した image に終始する場合もあるが, 多くは可成り自由な展開をみせる。

(III) そして最後に祈りが来る。祈りは Supplication であると同時に神の讚美で興味ある事には, 多くの詩が music の image で終わっている事である。

今迄に述べた事を背景に Meditation: Second Series 91 (本文末尾にその全文及び glossary を掲げる) をとり上げて詳しく読んでみることにしよう。

この詩は Taylor の他のすべての詩がそうである様に, ababcc と押韻する iambic pentameter で6行で stanza を形成している。次に Stanza 3 の in/sing, Stanza 4 の hang/Man, 最後の stanza の brim/Ring の様に, nasal n/m と rhyme する例, 又は terminal g を殆んど無視して rhyme する例は Taylor の他の詩にも多くみられる。

さて, この詩の text はマタイ伝 24章 27節の「人の子の再臨」からとられたものであるが, 詩の主題を知る為には, この節全体が読まれなければならない。「丁度, いなづまが東から西にひらめきわたる様に, 人の子も現れるであろう。」この部分では「いつわりの現れ」についての様々な警告がのべられ, 従って我々は「キリストのまことの現れ」を知らなければならないとある。即ちこの詩の主題は the Coming (παρουσία) と The Son of Man (人の子) の二つで, これは結局聖餐式の重要な意義でもある訳だ。この詩に対する説教は残っていないので, 内容については, 詩から推察するより他, 方法はないのであるが, 詩全体を通じて実に多くの聖

書への allusions が見られる。

Stanza 1 は前に述べた様に “Domine, Non Sum Dignus” の variation で始る。それは自分を聖餐式に列する事を許してくれた主の寛大さに対する詩人の驚きとなって現われている。自分を “poore Dusty thing” と呼ぶ詩人の告白は、そのすぐ前の繰り返しのつくる alliteration, “mee” “Even mee” 又それに続く with *thee*, even *thee* で強調され対比されている。Dusty には少なくとも次の三つの implications が可能である。

- (1) 第一は “mean, worthless, vile” 「とるにたりないもの」という意味
- (2) 第二はヘブライ人は喪に服する時、その頭に dust か ashes をかける習慣をもっていたことから dust は mortality を意味する様になった。
(Josh. 7: 6, Isa. 47: 1, Lam. 3: 29)

- (3) 最後に Genesis 2: 7 にある “主なる神は土のちりて、人を造り、命の息をその鼻に吹き込まれた。そこで人は生きたものになった。

例へば

DUST: ...the most striking use is in *Genesis 2: 7*. A right understanding of this use can be fruitful for the understanding of Hebrew presuppositions about life. That man was shaped by God out of the dust of the ground; and life breathed into him, is a basic affirmation of Hebrew “materialism.” Man is not a noble spirit temporarily imprisoned or entombed in the evil matter of the body; he is not a double creature of body or matter and soul or spirit: but in his primal state he is a natural, unified creature having life in the same way as all God’s living creatures. The material life, the senses, the temporal world, the world where we are now, with the life we have to live here and now, are man’s habitat. Whatever else is added to the OT and NT conceptions of life, this can never be subtracted. Alan Richardson ed. *A Theological Word Book of the Bible*. p. 70.

従って自分が dust より創られたという自覚は、更には神によって新しい生命の息を吹き込まれる事を熱望する詩人の自覚となって現われている。

「新しい^{いのち}生の契約としてのキリスト」を求める詩人の願ひはこの詩全体にくり返されている。

3行から4行はキリストと詩人とのへだたりを強調している。“fore whom, ’t’said; Bow the knee / Ye Angels bright...” は詩人の身の程すぎた光栄に対する驚きと、従って主のまねきに対する大いなる喜びを示している。この行は「ピリピン人への手紙」20:10 への言及だと考へられる。

最後の二行は、明らかに詩人はパウロの「ヘブル人への手紙」1～2章を念頭に入れている。そこではパウロは「キリストは神の子として天使より上位にあるが、自らためされ、苦んだので人間を救う事が出来る」即ちこの詩の主題の「人の子」の思想を述べている。天使は神性を持っているが、あくまで *angelos* で主体的に働く事は出来ない。

Stanza 2 では、詩人は聖餐式の場景を語っている。聖書ではマタイ伝(2: 626—29), マルコ伝(4: 22—25), ルカ伝(2: 215—20), ヨハネ伝(6: 53—57), 共観福音書では共に Last Supper を扱っているが、ヨハネ伝は共観福音書とは違った context を持っている。ここでは詩人は明らかにヨハネ伝(6: 53—57)に就いていっていると思われる。

John 6: 53-57

- 53) Then Jesus said unto them, Verily, verily, I say unto you, Except ye eat the flesh of the Son of man, and drink his blood, ye have no life in you.
- 54) Whoso eateth my flesh, and drinketh my blood, hath eternal life; and I will raise him up at the last day.
- 55) For my flesh is meat indeed, and blood is drink indeed.
- 56) He that eateth my flesh, and drinketh my blood, dwelleth in me, and I in him.
- 57) As the living Father hath sent me, and I live by the Father; so he that eateth me, even he shall live by me.

ここでは「人の子の肉」、キリストの再臨に就いての終末論的な考へ方、パンとぶどう酒が「生命の源」であるという考へ方、がひとしく強調されている。更に 55 節は殆んどその儘歌われている。

この Stanza 2 は Jesuits の Exercise of Meditation で云う “Composition of Place” (情景の想定) にあたる stanza であろう。ここではキリストが聖餐を司る祭司であると同時に、自分の血と肉をぶどう酒とパンとして準備する料理人として歌われている。ここで使われている、‘cookt up’ ‘white hands’ ‘in Shine’ ‘their White Holy Sapphick (Seraphic) Robes Divine’ はいづれもこの場の場景を visualize する事を助けている。

自分の血と肉を料理するというグロテスクな cannibalistic な ritual を歌ったものは Taylor の他の詩にも多くみられる。例へば Meditation (II) 108 の Stanza 8

Here is a feast indeed! in ev'ry Dish
 A Whole Redeemer, Cookt up bravely, Good,
 Is served up in holy Sauce that is,
 A mess of Delicates made of his blood,
 Adorn'd with graces Sippits: rich Sweet-Meats.
 Comfort and Comforts sweeten whom them eats.

はそのよき例であり、又他の所でも “what! feed on human flesh and blood? Strange mess!” と歌っている。

同じ聖餐式を歌ったものに George Herbert の “Love III” がある。Taylor の詩の中に Herbert を連想させる lines の多い事は、多くの批評家も指摘しているし、事実 Herbert の詩の phrase がそっくりそのまま出て来る場合もあるが、この両者の影響関係は推測の域を出ない。併し二人の詩の tone はそれ程似ているとは思われない。例へば Herbert の Love III

Love bade me welcome: yet my soul drew back,

Guiltie of dust and sinne.
 But quick-ey'd Love, observing me grow slack
 From my first entrance in,
 Drew nearer to me, sweetly questioning,
 If I lack'd any thing.

A guest, I answer'd, worthy to be here :
 Love said, You shall be he.
 I the unkinde, ungratefull? Ah my deare,
 I cannot look on thee.
 Love took my hand, and smiling did reply,
 Who made the eyes but I?

Truth Lord, but I have marr'd them : let my shame
 Go where it doth deserve.
 And know you not, sayes Love, who bore the blame?
 My deare, then I will serve.
 You must sit down, sayes Love, and taste my meat :
 So I did sit and eat.

は Love (Christ) と I (the poet) との間にかわされる対話の形式の dramatic parable であるが、Taylor の詩はいづれも詩人の monologue (即ち祈り) の形式である。もう一つの顕著な違いは diction にある。Taylor はしばしば卑俗な表現と sublime な表現、又は liturgical な表現を juxtapose して使い、それから生み出される一種の shocking な効果を挙げている。例へば“cookt up”という表現もその一例である。一方 Herbert は詩全体の tone をこの様な juxtaposition で破る事はめったにないのである。

Stanza 3 はこの詩の中で、最も複雑な stanza である。Stanza 2 では詩人は visualize する事に依って聖餐式の場景をつくり出したのであるが、それが非常に生々したものであるために、聖餐式に列なる事の出来るとい

う想いが、詩人のともすれば弱くなる魂に生命と喜びを与へるのである。この stanza には sea-image が一貫して用いられている。例へば動詞 “sink” “drown” “plunging down and up” “pops up” がそれを示している。困難なのは、sea-image の意味するところのものである。これは詩人の魂の ecstatic な状態を歌ったものである。“Ocean Sea of Flaming Joy” では Flaming Joy に重点があるので、Joy as broad or as deep as sea という意味であるが、“sink” とか “drown” に対して “pops up” はどういう状態を意味するのかこのままでははっきりしない。第四行の “As she attempts Magnificat to sing” がこの stanza の鍵になる様に思われる。“she” は “my fainty soule” を指す。Magnificat anima mea Dominum を歌うのは Virgin Mary でルカ伝一章 40~44 には次の様にある。

Luke I: 40-44

- 40) And [Mary] entered into the house of Zacharias, and saluted Elisabeth.
 41) And it came to pass, that, when Elisabeth heard the salutation of Mary, the babe leaped in her womb; and Elisabeth was filled with the Holy Ghost:
 42) And she spake out with a loud voice, and said, Blessed art thou among women, and blessed is the fruit of thy womb.
 43) And whence is this to me, that the mother of my Lord should come to me?
 44) For, lo, as soon as the voice of thy salutation sounded in mine ears, the babe leaped in my womb for joy.

この stanza の image は analogy によって、魂のある場所である “my heart” は womb を、“my fainty soul” は “the babe” を連想したものだとなれば、Elizabeth や Mary の場合に Mary の受胎に、Elizabeth の胎中の子供が喜びにおどった様に、詩人の魂もキリストと聖餐を共にする事に喜びをあげるという風に解釈する事は出来ないだろうか。だとすれ

ば、この ‘sensuous apprehension of thought’ は Taylor の詩がしばしば baroque とか metaphysical といわれる理由でもある。

Stanza 4 は詩人の supplicatory prayer で始る。bread も wine も共に、肉体的にも精神的にも生命の symbol である事は云うまでもない。Fat は Glossary の様に、the best part of a thing という意味で、神に捧げるべきものとされていた。(Neh. 9: 25, Ps. 63, Isa. 25: 6, Rom. 11: 17)

“When thou hast come again” は終末論的なキリストの再臨 Advent を指すもので、次の二つの stanzas ではこの「キリストの再臨」を扱っている。最後の二行は「人の子」(the Son of Man) としてのキリストを中心として居る。この「人の子」に就いては、現代の神学者の間で問題にされている個所であるが、ここでは Taylor は古くからの解釈をとっている様である。即ちキリストの人間の面に重点をおいている訳で、同じ様な考へ方は古くは、Venerable Bede などにも見られる。

Stanza 5 は詩人のキリストの *παρουσία* (coming) を主題とした meditation である。ギリシア語の *παρουσία* (動詞 *παρῆμι*) は元来、(1) 存在、現在、あること、を意味したのであるが、それが後になって (2) Coming (ad venio, Advent) を意味する様になった。第一行で詩人は “Thou art continually Coming, its true.” といっているが、ここでの意味は、第一の意味での *παρουσία* で、“Thou art always present” の意味である。キリストは Providences を通じて、又 Ordinances を通じて、その存在を様々な形で示す。

最初に Providences を通じて (1) ‘Some scowle and lower’ はキリストの怒り、(2) ‘thunder Sharp and fiery lightning spew’ は審判 (3) ‘Roses and Mary gold out shower’ は神の恵み (Grace) を示している。伝説によればバラはもともと天国に生えたもので、その香りと美しさは天国のすばらしさを人々に想起させるものであるといわれている。

次に Ordinances は Sacrament の事で、ここではキリストは自らの血と肉を与へる祭司の役をしている。

Stanza 6 は第二の意味での *παρουσία* (the final Coming of Christ) がとり上げられている。この点の聖書への言及は数多くある。(Matthew 8: 38, 13: 26, 14: 62; Mark 19: 28, 25: 31) “glory” “Bright” “Light” はいづれもキリストの再臨を指している。特に “Part of thy Exaltation Glory rich” という行は、「キリストの再臨」に於いてキリストが神の glory (*δόξα*) を代表して地上に現われるとされている。この stanza の最後の二行から、詩人は Supplicatory prayer を歌う。ここでは個々の Sacrament (Christ is present=*παρουσία*) と再臨 (the final coming of Christ=*παρουσία*) との対比がなされている。勿論この二つはギリシア語の元来の意味が示す様に同じものである。

最後の stanza も詩人は Supplicatory prayer をつづける。すべての prayer がそうである様に、詩人の姿勢は、主の Grace の前に於ける人間の受身の姿勢である。Stanza 1 で詩人が自分を dust と呼んで、主による新しい契約の生命をひたすら願った態度は、ここでは更に、自分を panis angelicus で充されるべき器 (trencher)、ぶどう酒で充されるべきさかづき、に例へている。vessel も人間の魂をおさめる「うつわ」即ち人間の肉体の事であるが、詩人は最後に「人間の肉体はキリストの新しい契約の生命によって充されて、はじめてキリストを讃える歌をうたう事が出来る」といって、この詩をおえる。この詩は聖餐式におけるキリストの *παρουσία* の体験こそ、終末論的なキリストの *παρουσία* への準備であるという詩人の瞑想で終始している。

一つの詩で Taylor のすべての詩の特徴を要約する事は困難であるが、難解な Taylor の詩は、一つ一つ詳細に読まれなければならないのは当然であるし、私はこうした読み方こそ、Taylor 理解に必要なだと思う。一応、

Taylor の作品の主なるものがそろった現在、更に全体の詩との関連に於いて、或いは説教との関連において読む事が可能になった。従って、今後10年間に、アメリカ文学史における Edward Taylor の評価も変わってくるであろうし、又変らなければならないと思う。

——これは第一回アメリカ文学会全国大会（1962年10月27日、於同志社大学）に於いて発表したものである——

**91. Meditation. Matth. 24. 27. So also shall
the coming of the Son of Man be.**

What once again, My Lord, allowst thou mee,
Ev'n Mee, poore Dusty thing, thou to enjoy,
With Thee, ev'n thee, 'fore whom, 't's said, Bow the Knee
Ye Angells bright, Communion Graceously?
Thou art so glorious, thy Very Feet
Its glory to the Angells bright to greet.

And shall I on thy Table Fare, Lord, feed,
That is Cookt up by much more Whiter hands
Than ever Angells usd? Thy flesh indeed
Is meate, and Blood is Drink and on it stands.
The Waiters are bright Angells all in Shine
Of their White, Holy, Sapphaick Robes Divine.

The thoughts hereof entring upon my Heart
Nigh sink, and drown my fainty Soule ev'n in
The Ocean Sea of Flaming Joy best part.
As she attempts Magnificat to sing
And plunging down and up herein, oft Cries,
As she pops up her head, *Raptures of Joyes.*

And now, my Lord, me with thy foode sustain:
Mee in good liking make, yea Fat, and fine,
To wait on thee when thou hast come again:
For Come thou wilt, and kindly visit thine.
Thou lov'dst our Nature that its blossoms hang
In thy Description. Hence the Son of Man.

Thou art Continually a Comming, its true,
In Providences Some, that scowle and lower,
That Thunder sharp and fiery lightening spew.
Yet Roses Some, and Mary golds out shower.
Thou comst in Ordinances too: and dost

The golden gifts give of the Holy Ghost.

But still, besides this, there's another which

Our text Embellisheth in glory bright.

Part of thy Exaltations Glory rich

When thou comst with all Angells train of Light.

Then by thy present Comings furnish mee

That I when thou shalt come, may wait on thee.

Hence loade my Trencher with thy Flesh Divine :

Its Angells foode. My Soule doth almost sink :

And press thy Grape into my Cup : Rich Wine.

Lord make thy Blood indeed, my dayly drinke.

When with thy Fare my Vessels fill to th'brim,

Thy Praise, on my Shoshannims, Lord, shall Ring.

GLOSSARY

First stanza :

- Dusty** mean, worthless, vile. DUST-applied to the mortal frame of man (usually in reference to Gen. 2:7, 3; 19). As the type of that which is worthless.
- The Hebrews, when they mourned, put dust and ashes upon their heads. Josh, 7 : 6, Isa. 47 : 1, Lam. 3 : 29.
- bright** beautiful, fair, glorious. cf. Milton, *Paradise Lost*, IV, iii, 22. "Angels are bright still, though the brightest fell."
- glory** praise and thanksgiving : cf. "Glory to God in the highest." Probably Taylor also had in mind other connotations of glory : majesty, honor, fame, respect, veneration.
- Feet** The human foot, because it touches the dust of the earth, is used to symbolize humility and willing servitude. The woman in the house of the Pharisee who washed Christ's feet with her tears did so as a token of her humility and penitence, and her sins were forgiven (Luke 7 : 38). Christ himself washed the feet of His disciples at the Last Supper (John 13 : 5). It is on the tradition for bishops to perform the ceremony of washing feet on Maundy Thursday. (George Ferguson :

Signs and Symbols in Christian Art.) Taylor uses mainly to show humility on the part of angels.

Second stanza :

- Fare** food, regarded with reference to its quality. Supply or provision of food.
- meate** food in general; anything used as nourishment for men or animals; usually, solid food, in contradistinction to drink. Now *arch.* and *dial.*
- White** *fig.* as a symbol of purity, goodness, truth, joy, etc. Also, morally or spiritually pure or stainless, unstained, innocent.
- Shine** brightness or radiance shed by a luminary or an illuminant. A beam or ray, a halo. *Obs. fig.* brilliance, radiance, splendour, lustre. Also, a specious appearance.
- Sapphick** Seraphic? (Stanford)
adj. of or pertaining to the seraphim, of attributes resembling what pertains to the seraphim, worthy of a seraph; ecstatically adoring. Concerned with sublime objects.

Third stanza :

- fainty** *Obs.* except *poet.* and *dial.* faint, sickly, languid, in later use chiefly inclined to swoon.
- Magnificat** the hymn of the Virgin Mary in Luke 1: 46-55. (in the Vulgate beginning, *Magnificat anima mea Dominum.*) used as a canticle at evening or vespers. Also, a musical setting of this canticle. Hence, a song of praise; a *pæan*.
- pop** (onomatopoetic) to pass, move, go or come promptly, suddenly, or unexpectedly (up, down, in, out)
- Rapture** the act of conveying a person from one place to another, esp. to heaven; the fact of being so conveyed. Transport of mind, mental exaltation or absorption, ecstasy; now esp. ecstatic delight or joy. The expression of ecstatic feeling in words or music rhapsody.

Fourth stanza :

- good liking** bodily condition, esp. good or healthy condition; good condition, *embonpoint*, *cf.* Fat.

- Fat.** The Mosaic law declared that to the Lord belongs all the fat of sacrificial animals (Lev. 3: 16, 17). The ground of this law was that the fat was the richest part of the animal, and therefore belonged to God. The word is used figuratively to mean the best part of a thing. Neh. 9: 25, Ps. 63, Isa. 25: 6, Rom. 11: 17. Here, used as adj, with these implications.
- fine** of superior quality, choice of its kind. Free from foreign or extraneous matter, having no dross or other impurity, clear, pure, refined. Pure, sheer, absolute, perfect.
- blossoms** *fig.* an attribute, product or token.
 “Thou lov’dst our Nature that its blossoms hang In thy Description. Hence the Son of Man.” The lines may be rendered thus: ‘You loved mankind so much that man’s attributes are to be found in you. Hence you are the Son of Man.’ Therefore, Christ in his final coming will show his concern toward man.
- Fifth stanza:**
- Providences** “Providence in Generall is an externall worke of God whereby he desposeth of all things with all their Actions” (*Westfield Church Record* in Stanford’s glossary.)
- scowle** to look with a malignant or threatening expression; to look angry or sullen.
- spew** to cast out (or up), to eject or reject, with abhorance, contempt, or loathing.
- Mary golds** Marigold, Mary go[u]ld, / proper name Mary [presumably with reference to the Virgin Mary]+gold. The name of several plants having golden or bright yellow flowers.
- shower out** to pour (out) down or discharge in a shower or showers; to send down or pour out in abundance and rapidly.
- Ordinances** here, applied esp. to the Sacrament of the Lord’s Supper.
- Sixth stanza:**
- Embellisheth** to render beautiful, to ornament.
- text** *spec.* The very words and sentences of Holy Scripture; hence, the Scriptures themselves; also any single book of the Scriptures.

Seventh Stanza :

- Trencher** a flat piece of wood, square or circular, on which meat was served and cut up; a plate or platter of wood.
- Angells foods** *panis angelicus*: cf. Psalm 78: 25, "Man did eat angels' food: he sent them meat to the full."
- vessel** a container. *fig.* the body, *esp.* as the receptacle of the soul.
- Praise** the expression of admiration and ascribing of glory, as an act of worship. Hence, as this is chiefly done in *song, the musical part of worship*, eulogy.
- Shoshannims** Shushan-Eduth, Cf. Ps. 45 and 69. Ps. 60, 80. Rashi understands as an instrument of six strings. Probably the name of a tune (Ibn Ezra and moderns) set to the melody of lilies, or Lilies of the Testimony. Here an instrument. (*A Dictionary of the Bible*)

Bibliography :

Oxford English Dictionary

- Ferguson, George: *Signs and Symbols in Christian Art*, New York, 1961.
- Hastings, James, ed. *A Dictionary of the Bible*.
- Richardson, Alan, ed. *A Theological Word Book of the Bible*. New York, 1955.
- Stanford, Donald E. ed. *The Poems of Edward Taylor*, New Haven, 1960.